

A history of English language (§ 104～110)

発表者 吳是 窪寺茉莉奈 柴橋瑛里佳

1 summary

104 General Adoption of English in the Fourteen Century

14世紀、英語はさらに大衆的な場面で受け入れられ始める。その直接的な証拠は当時の文献でよく現れる。以前のイングランドの文学は主にフランス語で書かれたので、英語で作品を書こうとした作家たちは英語の使用に正当性を与える必要があった。これらの要求はそういった当時の言語的状況を説明しようとする試みの発生にもつながった。

三つの文献が例として挙げられる。1300年にイングランドの北部で書かれた文献と1325年の William of Nassyngton's Speculum Viate of Mirror of Life、最も有名な例でもある1325年のArthur and Merlinがその例で、これらの作品の中で作者はすべての人が英語を知っているとは限らないといったことを前提としている。

実際に、当時のフランス語と英語は共に使われてはいたが、多くの部分で衝突するような場面が多く、特に教会で状況によってフランス語と同時に使われた英語の姿や、裁判所や法律界で公式的に使われていた言語はフランス語であったが判決を下す現場では英語が使われるなどのことからそういった傾向が観察される。英語は漸進的にフランス語が支配的であった社会でもその影響力を増していった。英語の混入にも関わらず当時の村の議会やギルドの事業においてはフランス語が最も多く使用されたと見られる。しかし、当時の資料を分析するとフランス語で書かれてはあるがフランス語が得意でない人が書いたような文書も多く発見できる上、Trevisa's Statementでは今後のフランス語の教育を強調しながら、今の子供たちはだんだんとフランス語を学ばないようになり、こういった傾向は彼らの未来において悪影響を与えるだろうと予測した。これらの事例から推すと当時のイングランドのフランス語話者らはバイリンガル的な特性を強く保持していたとも考えられる。

議会(parliament)もこのような流れから逃れることはできなかった。議会の公式的な言語はフランス語であったが、1362年に初めて議会開会で英語の演説が行われた依頼、多く部門において英語が基準的な言語として位置付けるようになり、Richard二世の退位を通じて公式的な文献にもラテン語とともに英語が記録されるようになる。

105 English in the law courts

1362年に英語を国の言語として支配的なものに復活させるというという重要な進展があった。征服の後の長い間フランス語は全ての法律的な言語であった。しかし14世紀、英語の実用化は正当化されていなかった。そして1356年ロンドン市長と市議会議員はロンドンとミドルセックス州の法執行官の法廷で英語を使用するように命令した。

その後も英語化は進み、1362年には全ての民事訴訟を英語で執り行うことが決まった。

106 English in the school

学校の中での言語も英語がフランス語にとって変わるようになった。14世紀の黒死病が流行った後、2人のオックスフォード大学の男性教員が英語の教育に偉大な革命を起こした。幸運な環境により、ジョンコーンウォールがこの時にオックスフォードでラテン文法を教える資格を取った。革命は、有能な教師たちに貢献した。とにかく、1349年イギリスは英語を学校で使用し始め、1385年には一般化した。

107 Increasing Ignorance of French in the Fifteenth Century

14世紀初頭にはフランス語を話せない貴族は顕著に現れてきた。15世紀にはフランス語を流暢に話せることは1つの能力とみなされていた。また、書く能力でさえ、一般的では無くなってきた。

これは1400年にジョージタンバーが英語で王子に手紙を書いたことからも分かる。

「…高貴な王様、私の手紙を英語で書くことに驚かないでください。それはラテン語やフランス語よりも分かりやすいのです。…」

108 French as a Language of Culture and Fashion

後期中英語期イングランドでのフランス語の使用は衰退していった。15世紀初頭John Bartonがフランス語学習に関して書いた論文*Donet Francois*にはイングランド人がフランス語を学ぶ三つの理由が指摘されている。一つ目はフランスとの意思疎通のため、二つ目は法律が主にフランス語で書かれていたため、三つ目は紳士淑女が進んでフランス語で手紙を書くためというものであった。二つ目と三つ目は現在にまで受け継がれなかつたがフランス語は長い間特権階級の証であり、文化と流行を象徴する言語として認識してきたことが分かる。

109 The Use of English in Writing

15世紀英語はラテン語やフランス語に取って代わって文書で使用されるようになった。1420年から1430年の間*the Paston letters*や*the Stonor correspondence*で初めて英語の手紙が登場する。1450年以降は英語での手紙が一般的となった。また1383年中世最初の英語の遺言が現れる。1400年以前は稀であったが、15世紀に入りHenry IVやHenry V, Henry VIの遺言が全て英語で書かれた。同様にギルドや町の記録も英語に取って代わった。1430年にはいくつかの市町が条例を英語に訳し、1450年以降には英語での記録が一般的となる。議会の記録も1423年を境にフランス語から英語へと取って代わり、1489年にフランス語は完全に消滅した。Henry Vの統治後1425年が書き言葉における英語の使用の転換期と言えるだろう。

110 Middle English Literature

1150年から1250年は*The Ancrene Wisse*や*the Ormulum* (c. 1200) のような宗教的な文学が主であり、Period of Religious Recordと呼ぶことができる。例外として*Layamon's Brut* (c. 1200) や*The Owl and the Nightingale* (c. 1195) のような非宗教的な作品も存在する。次の100年間は英語がフランス語に対して復権の兆しを示し始め、広く使われるようにな

る。フランス文学が英語に翻訳され非宗教的なロマンスというジャンルが見られた。1250年から1350年はPeriod of Religious and Secular Literatureと呼ばれる。また1350年から1400年はPeriod of Great Individual Writersと言えるほど英語はほぼ完全な復活を果たした。*Canterbury Tales*や*Troilus and Criseyde*といった作品を書いたGeoffrey Chaucer(1340–1400)を始めとして*Piers Plowman*(1362–87)を書いたWilliam Langland、John Wycliffe(d. 1384)、*Sir Gawain and the Green Knight*他三つの寓意的、宗教的な詩を残した詩人などが現れた。15世紀はImitative PeriodまたはShakespeareまでのつなぎの時期としてTransition Periodと呼ばれている。過小評価されているがLydgate、Hoccleve、Skelton、Hawesなどが活躍した。スコットランドではHenryson、Dunbar、Gawin Douglas、Lindsayなどが活躍した。

2 Question

14世紀のイングランドは英語とフランス語が混合した「バイリンガル社会」ともいえる。現代にもこういったバイリンガル社会と考えられる国家もしくは地域があるだろうか

3 Research

・英語にはox 「牛」、 beef 「牛肉」 のように食肉と動物に別々の語を使う習慣がある。生きている動物に対する語は英語本来語、食肉を表す語はフランス語からの借用である。スコットランドの小説家ウォルター・スコットの歴史小説「アイヴァンホー」ではその起源について触れられている。12世紀動物を飼うのは英語を話すアングロサクソン系の人々であり、その肉を食べるのはフランス語を話す支配者達だったからというものである。実際18世紀頃までフランス語借用語は動物を表すのにも用いられており、現在のような厳密な使い分けが確立したのはだいぶ後の事である。

参考文献

- ・堀田隆一、『hellog ~英語史ブログ』、「#2503. 中英語文学」
- 「#2622. 15世紀にイングランド人がフランス語を学んだ理由」 「#1207. 英語の書き言葉の復権」
- ・唐澤一友、『世界の英語ができるまで』、亜紀書房、2017